作成：2016年4月1日　NPO法人いけだエコスタッフ

五月山の観察ポイントと学びの視点例　　資料集

【モデルＡ】　炭焼き小屋コース～五月平高原コース

**A-2　すがたに広場**

五月山と私たちの関わり方の変化

昔の人々は生活に必要な資源を五月山から享受していました。伐った木で家を建てたり、薪にして燃料にしたり、きのこ類を栽培するのにも使われました。また、野草をつみ、猟をしてイノシシやシカを食べていました。五月山の中では居住地域ごとに利用できる区画が決められ、その中で資源が枯渇しないよう工夫して使われていました。

今、私たちのほとんどは癒しや運動、動植物の観察といった余暇を有意義に楽しむ場として利用しています。そのため、昔より木を伐らなくなり、高い木が密集した「暗い森」が増え、災害にもつながる危険性が増えてきました。植物と動物の適度な生育環境を整えるために、市やボランティアにより定期的に間伐する里山の保全活動が重要となっています。これは五月山に限らず全国の里山が抱える課題でもあります。

イノシシやシカの影響

昔に比べてイノシシやシカの狩猟が減ったことにより頭数が増え、山のふもとの農作物が食べられたり、シカが山の木の皮を食べて木が枯れる（シカの食害）といった被害が増えています。フェンスを設置したり、罠を仕掛けたり、定期的に狩猟することで防止していますが、減少させるのは難しい状況です。五月山に限らず全国的に同様の課題があります。

＊捕獲されたイノシシの動画があります。

＜池田市のシカ、イノシシの捕獲数＞

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| **年度** | **有害シカ** | **狩猟シカ** | **有害イノシシ** | **狩猟イノシシ** |
| H15 | 2003年 | 12 | 7 | 5 | 9 |
| H16 | 2004年 | 16 | 14 | 3 | 13 |
| H17 | 2005年 | 19 | 14 | 11 | 7 |
| H18 | 2006年 | 21 | 25 | 13 | 11 |
| H19 | 2007年 | 15 | 7 | 6 | 4 |
| H20 | 2008年 | 19 | 20 | 11 | 16 |
| H21 | 2009年 | 15 | 19 | 9 | 10 |
| H22 | 2010年 | 17 | 30 | 79 | 33 |
| H23 | 2011年 | 25 | 18 | 25 | 14 |
| H24 | 2012年 | 19 | 17 | 31 | 5 |
| H25 | 2013年 | 19 | 18 | 46 | 7 |
| H26 | 2014年 | 37 | 39 | 42 | 26 |

※狩猟の数字は食用などの目的も含むもの

（以上、緑のセンターへの取材より）

**A-4　眺望点**

「がんがら火祭り」の歴史

8月24日、池田市で毎年行われるがんがら火は、1644年（正保元年）にその興りの起源を持つ、北大阪（北摂）を代表する貴重な伝統的火祭りです。また、同行事は、1978年（昭和53）10月21日、池田市の重要無形文化財祭礼行事に指定され、池田市民だけではなく多くの人に親しまれています。祭り当日は、池田のシンボルである五月山に京都の送り火の如く、大一文字と大文字がともされ、町には重さ100キログラム長さ4メートルの大松明が二本一組で二基繰り出します。

全行程3キロメートルの道のりを光々と火を燃やしながら練り歩きます。その迫力は、毎年多くの見物客を魅了しています。がんがら火は、最初から今の形式になったのではなく、長い時を経て徐々に形を変え、要素を加えながら発展してきました。

＜その興りと経緯＞

がんがら火は、愛宕神社（五月山山上にある）と切っても切れない縁で結びついています。その始まりも愛宕信仰との関係があります。1727年頃作成された伊居太神社の「穴織宮拾要記」によると京都の愛宕神社との経緯があった事が記されています。

正保元年（1644）に多田屋・板屋・中村屋・丸屋の四人が、五月山山上で百味の箱を竹に立て火をともしたところ、人々がその火を見て、池田に愛宕が飛来したといいながら、競って参集したのが池田の愛宕神社のはじまりとされています。防火設備もほとんど無く、日本の家屋には耐火素材がほとんど使われていませんので、一旦火災が発生すれば町全体を焼き尽くすような大惨事にもなりかねません。常にそういう状態に晒されていた当時の都市は、火に対する怖さの気持ちは現在では想像もできません。

そういう時代背景から、当時は京都の愛宕さんは将軍地蔵を奉り、火伏に霊験ありと信じられていましたので、その信仰も盛んでした。池田地域にもその信徒が多かったのですが、京都まで行くとなると徒歩で数日がかりの大仕事で、それが手軽にお参りできるのは有り難いと五月山の新愛宕は忽ち繁盛しました。その評判があまりに高いために、京都の愛宕神社から抗議があったのですが、箕面勝尾寺宝泉院は京都所司代板倉周防守にはたらきかけて和解を果たします。

それ以後、本格的な社殿建設を今の位置と同じ五月山山上に進められました。専門家によると、土着信仰では神が飛来するというパターンも多く見られるが、池田における愛宕神社の創始には、典型的な都市における民衆信仰の発生過程が見られるとのことです。

さて、当時の祭りの様子を見てみますと、はじめは「百味の箱を竹に立て火を灯した」だけの質素なものでしたが1696年（元禄9）に出された絵入りの俳諧集「俳諧呉服絹」には、五月山愛宕道で高張提灯の下に座した僧が鐘を叩き、その前を参詣の人や駕籠が登って行く様子が描かれています。また、愛宕火（がんがら火は後世になってよばれるようになった）について多くの俳諧が残っていて、池田に隣接する近在近郷の者にとって秋を迎える季節の風物詩となっていました。一句ご紹介しますと「愛宕火や池田伊丹の秋ひとつ　休計」などがあります。この5年後の1701年（元禄14）に刊行された「摂陽群談」には、愛宕火について「毎年七月廿四日（今は8月24日）夜種々ノ灯篭二火ヲトモシテ愛宕火ト号祭ル大坂北ノ町終ヨリ見ル人星光ヲ疑フ」とあって、当時の愛宕火が灯篭に火をつける形のものであったことがわかります。また、高層の建築物がなかった時代には大坂の町からも望まれたほど盛大に行われていました。他にも、1798年（寛政10）に刊行された「摂津名所図会」や1803年（享和3）に出された曲亭馬琴の「俳諧歳時記」にも、灯篭に火を点じてこれを愛宕火と称し、それが大坂の町から星のように望まれた事が書かれています。

このようにはじめは信仰による静かな祭事だったものが、時代を経るに連れて地域の娯楽の色付けもされていきました。現在のように娯楽がなく、キツイ労働が当たり前の時代には、自然な成り行きだったのかもしれません。当時の祭りの記録には、各町毎に作り物（その時代を反映した人物や名物、ヒーローなどを人形などにして町々を飾る）が出され、だんじり、夜店が出ていたとの記録も見られます。後に（江戸期中頃に）文字火の形式が変わったりしますが、それ以降は明治時代まで、大旨スタイルは継承されています。昭和初期頃には大松明が登場し、がんがら火は華やいだものに変貌して行きます。今のがんがら火は、この大正から昭和の初めに完成されたスタイルを受け継いでいると言えます。

＜五月山の文字火＞

五月山の文字火が資料上で登場するのは、1819年（文政2）七月廿四日が最初です。郷土史家の故島田福雄氏による調査では、1803年（享和3）以降の化政時代（11代将軍家斉の頃19世紀前半あたりをいいます。）にその興りがあったことがわかりました。また、同じく郷土史家の故林田良平氏も1714年（正徳4）以降の記載がある「伊居太神社日記」等から文政以前、既に愛宕火の灯篭が一文字火になっていたこをが摘されています。

しかし、その形式は現在のものとは違い、木製の足つき灯篭を山肌に突き立てて文字火にしていました。また、はじめの頃はその作業を有志が行なっていましたが、その後、愛宕講の講中が、更に後には甲ヶ谷町（今の城山町）が受け持つようになり、次第に文字火を燈すようになりました。点燈場所については現在よりも少し東側だったようです。この頃に建石町の文字火も始まっています。

時代を経て、現在の文字火は城山町の「大一」と建石町の「大」の字ですが、城山町の「一」の字がいつ頃から「大一」の形になったかは古文書の記録には無く、時代は下った1910年（明治43）3月に箕面有馬電気軌道（阪急電鉄の前身）が発行した「箕面有馬電気軌道沿線名所御案内」で、五月山の文字火の紹介がされます。 「愛宕祠　山路七、八丁の処に在り、七月廿四日の夜、松明を点じて大と一との二文字を現はし、以て法会を修す。」とあって、この頃に大一文字（大一の意味は、大は天を、一は大地を松明は人を象徴との記載=愛宕神社縁起）になっています。また、肥松（松の木を伐採した後の切り株の根に含まれる油分が凝縮したところ。地中で20～30年以上経たないとできない。）がその燃料になっています。この頃から現在まで、そのスタイルは変わることなく受け継がれています。

＜大松明＞

現在は行事全体を指してがんがら火祭りと呼ばれていますが、これは市中を練り歩く松明に随行する八丁鐘や半鐘を打ち鳴らす音にの名の由来があります。また、戦後に祭が再開された時には、焼夷弾を切って鐘のようにしたものやバケツを叩いて代用していました。この大松明を担いでの市中行進の始まりは、1928年（昭和3）からです。因みに、建石町のがんがら火市中行進も同じ時に始まっています。その後発展し、現在の大松明のスタイル（重さ100キロ、長さ4メートル）になります。当初の松明は今より軽く60キロ程でした。年代は少し違いますが、1933年（昭和8）の古写真から当時の様子を知る事ができます。この頃は大松明の数が、二本一組の一基だけです。これも文字火と同じく、その当時から形式自体は変わることなく、今に受け継がれています。

戦中と戦後暫くは行事縮小を余儀無くされ、愛宕神社に火を貰いに行くだけの細々とした行事が続けられていました。しかし、1948年（昭和23）に復活し、参加人数も以前の倍になります。この時から大松明は二基となり、その後間もなく子供松明もはじめられました。

松明が愛宕神社の御神火を頂いて町を練り歩く途中、随所にその燃え残りを落とします。愛宕と言えば火伏せの神様であるため、御燈明に灯すと火除けになると、こぼれ火を拾い持ち帰る人もあります。今もこんな習慣が見られます。これもまた、受け継がれた池田の風物詩のひとつです。

また、西暦2000年のミレニアムでは、節目の都市を盛大に祝う池田市内のイベントに合わせて、大松明も一基増やして三基となりました。これがキッカケとなって、三基で行事が行なわれていた時期も長くありましたが、現在は二基での巡行となっています。

　　（参考：がんがら火　公式ホームページ　<http://www.gangara.gr.jp/>　）

【モデルＢ】　大文字コース～望海亭コース

**B-2　秀望台**

「がんがら火祭り」の歴史　⇒　A-4 眺望点（p.2～4）を参照

**B-4　望海亭跡**

**「望海亭**」と碑の歴史

文明年間（1469～1487）、五月山の中腹に大広寺を創建した池田城主・池田充正（政）が、寺の後ろの山頂に望海亭を建て修禅の場とした。当時は古くから文人との関わりがあり、文明12年（1480）には京都南禅寺僧で詩人としても著名な景三が祥山の依頼で「望海亭記」（寺蔵）を著し、永正のころ（1504～1521）、連歌師・牡丹花肖柏が止宿し、池田市一族に連歌の愛好者を生んだ。

池田最大の酒造家大和屋の当主で、幕末に衰微の道をたどりはじめた池田文化を支えた文人でもあった山川正宣（やまかわ　まさのぶ、1790～1863）が、天保12年（1841年）に望海亭跡の保存を図るため「望海亭記」の碑を建立した。

　　（参考文献：「新修　池田市史　第二巻」、「池田学講座」）